

深まる分断、増す不透明感：新しい時代へ紡ぐ言葉を

- ▶ どうしたら人とつながれるのか、という問題意識を抱く。
 - ▶ 対話とはめっちゃくちゃに難しく、時につらいものだ。勝ち負けを決めるのは簡単で、こっちのほうに分かりやすい。ひとと考えるのは難しい、だからやる。
 - ▶ わたしがわたしであることを確認することができるのも、他者の言葉によってなのである。
 - ▶ わたしたちは互いに、誰一人わかりあうことはできない。誰もがわかっている。その事実が、わたしたちをやわらかくつなぐ。それで他者との差異を認め合う。
 - ▶ 日常のもやもやには哲学のネタが埋まっていて、政治的、社会的な問題もはらんでいる。人は集まると競い合うが、答のない問いを中心に置くことで、つながれる。
-
- ▶ 対話の基本は、向き合う相手に感心を持ち、意識を集中し「話」を聞くこと。
 - ▶ SNS隆盛の現代では、断片的な情報が一方的に流れ込み、相手の意見を打ち負かそうとする人があふれる。「人の話を聞けないメディア」が、終わりのない応酬。そして分断を生む。
 - ▶ 「個人のアイコンが記号に見え、取り替えの利かない『人間』が向こうにいることを忘れてしまう。
 - ▶ わたしたちは一人の人間が生きていることを忘れずにいられるかが試されている。
-
- ▶ わたしたちの世界には、回収されない伏線が無数にある。映画や書籍の中で、割りばしでアイスコーヒーをかき混ぜたら、意味をもってしまう。だからわたしたちはそれを省く。意味のないそれは、ただのノイズになるからだ。
 - ▶ そこにこそ現代人がないがしろにしている価値があると主張したいわけではない。それがただあるということがある。それだけのことだ。
-
- ▶ わたしは、思い出せないということを書く。何かが失われたということを書く。適切に保存ができないということを書き、くり返し、くり返し書く。
 - ▶ 見ることは、変えることだ。自分自身を超え、変えていくことだ。世界は不適切に保存され、手渡される。それを、もっと見ようとする。見ようとすることで、知っていたと思い込んでいたものが変形する。知っていたと思い込んでいた自分が変わる。ならば、どうするかだ。
 - ▶ 見るだけで終わることはできない。見ることは、わたしたちを当事者にする。共に生きるひとにする。そうしたとき、わたしはどするかというところまで、問われている。

「世界の適切な保存」 哲学者 永井玲衣著より一部抜粋
「水中の哲学者たち」 哲学者 永井玲衣著より一部抜粋
哲学者 永井玲衣執筆新聞記事より一部抜粋